「平成 24 年度　真名川ダム弾力的管理検討委員会」　議事概要

○日時：平成 25 年 1 月 21 日（月）13 時～15 時
○場所：多田記念大野有終会館（結とぴあ）　３０６号室
○議事内容：
　■平成 24 年度の実施結果
　■平成 25 年度の実施計画
　■本格運用に向けて
　上記 3 点について事務局から説明。
　主な質疑応答、意見の内容は、以下のとおりである。

■平成 24 年度の実施結果

【H24 までの状況について】

（委員）
・この 2 年で、H23 台風 15 号と H24.9 の 2 回の大きな出水があった。これくらいの規模・頻度で出水があると白河原が維持されることがわかってきた。
・水辺の楽校付近では、淵が浅くなっているような印象を受けている。
・置土の土砂が下流の淵をなくしているのではないかと懸念している。

（委員長）
・大きな出水により、河道ではみお筋の変化や礫河原の出現、瀬・淵や砂州の移動等、様々な変化が起こる。一方、中小出水では瀬・淵の高低差が小さくなる傾向がある。河川というものは、このような変化を繰り返すものである。
・参考資料の航空写真から、真名川全川で土砂が移動している様子が確認できる。現在実施している置土だけでは、航空写真のように真名川全川での河床変動が起こるとは考え難い。おそらくこれは出水と伐木の両方の効果だと推察される。どんな頻度・規模の出水、土砂供給があれば現状が維持できるのか、議論が必要である。

【調査結果について】

（委員）
・水辺の楽校では、H23 台風 15 号の 1 ヵ月後はヒゲナガカワトビケラなど底生動物はわずかだったが、その 3 ヵ月後には回復していた。H24 の調査も 9 月出水のほぼ 3 ヵ月後なので、回復後だったのかもしれない。生き物のポテンシャルは素晴らしい。
・今回礫河原が形成された部分は、地盤高が低水位以下のところだと考えられる。LP データで高さをチェックしてみてはどうか。

■平成 25 年度の実施計画

【調査計画について】

○魚類調査計画

（委員）

・H25 の調査項目に魚類調査が入っていないが、是非とも実施して欲しい。前回調査が H21 なので、次回が H29 となると、1 回/5 年ではなく 1 回/10 年になってしまう。

（事務局）

・H23 か H24 に福井県で河川水辺の国勢調査の魚類調査を実施していると思い、H29 に調査を実施すれば 1 回/5 年の頻度になると考えた。ただし、本当に実施したかどうかは確認していない。

（委員長）

・福井県は H23、H24 に真名川で魚類調査を実施していないとのことであり、H25 に魚類調査を実施したほうがよいと思う。

○その他

（委員）

・真名川では鳥類調査は実施されていないが、今後やってみてはどうか。

・過去の調査結果からわかったこと等を整理した上で、次に実施する調査の目的を明確にし、計画的に調査を実施してほしい。

（委員長）

・河川環境調査について、毎年フルスペック・フルメニューで実施する必要はない。ただし、大規模な出水の前後にはその変化を把握できるような調査をどう行っていくかということが大事である。

・航空写真や航空レーザーによる測量は経年変化を把握するのに非常に有効であるので、大きな出水後には撮影しておくのがよいと思う。

【自然出水再現放流について】

（委員）

・これまでの成果として、45m³/s までの流量では土砂は動かず、70m³/s で若干動いたことがわかっており、土砂の移動には最低でも 70m³/s は必要だと考える。また、これまで実施してきたフラッシュ放流規模・頻度では、草が伸びるばかりで礫河原は維持できないことがわかっている。

（委員長）

・これまでの弾力的管理試験により、ダムからの放流や土砂供給といったダム側からのアクションと、自然再生試験や伐木などのダム下流側からのアクション、さらに 300m³/s 程度の大きな出水の組合せによって、川が動き変化が起こることが確認できた。

【自然再生試験について】

（委員）

・これまでに、元々ワンドではないところでワンド再生しても、すぐに消失してしまうことがわかっているので、かつてのワンド跡のところでワンド再生を試みるほうがいいと思う。

【その他】

○地下水について

（委員）

・地下水は大野市の特色であり、地下水再生に取り組んでいるが、真名川の河川環境改善の取り組みとも情報連絡を密にして進めていきたい。

・大野市の特色を活かした自然再生試験を今後実施していってはどうか。例えば大野市では、地下水涵養の一環として、冬水田んぼという取り組みを実施しているように、ワンド等の自然再生が地下水再生の取り組みでもあることを含ませることで、真名川の弾力的管理が注目を浴び、一層光り輝く事業になると思う。

○冠水頻度について

（委員）

・冠水頻度と砂州の形成の関係について整理してみてはどうか。九頭竜川の下流では、冠水頻度が 50 回/年で礫河原が維持できるという調査結果がある。

（委員長）

・下流域では冠水頻度が 50 回/年で礫河原を維持できるかもしれないが、河川の下流と上流で礫河原の形成要因が違うように思う。下流では冠水頻度が重要な要素で、上流では出水の規模のほうが重要な要素だと思う。

○伐木について

（委員）

・平成２４年度の伐木予定箇所は、佐開橋の上下流付近であり、真名川の下流部に未伐木の部分が残っている。

■本格運用に向けて

（委員長）

・弾力的管理試験と本格運用の違いは何か。

・マニュアルにはどのような項目（内容）を盛り込む予定か。

（事務局）

・弾力的管理試験はトライアル、本格運用は運用方法をマニュアル化するイメージである。

・平面二次元河床変動計算結果を踏まえて、放流量や放流頻度、放流時間など、放流方法を明確にしたい。土砂供給（置土）や自然再生試験については、内容を明確に記載する予定はなく、今後も試験的に継続していくこととなるだろう。

・弾力的管理本格運用の新しいルールに基づく放流後の追跡調査で環境改善が見られなかった場合、ルールの見直しも考えている。

・本格運用開始後の調査は福井県で実施してほしいという思いはあるが、今後調整していきたい。

（委員長）

・本格運用後の調査については、福井県に一任するのではなく、国や県、委員などみんなで連携し、補完することで全体像を把握してほしい。今後、効率よく進めていくための分担を考えるとよいと思う。また、調査結果や工事予定箇所等についても、情報共有を図ることで効率的な調査ができると思う。

・河道も含めて流域でどのような弾力的管理のメリットを享受できるか、ということが重要であり、それによって大野市民の関心を呼び込むことになる。そのためにも連携を深めてほしい。

以上